



で き こ と

平成24年7月20日(金)、当館で平成24年度公立図書館等職員専門研修「児童・青少年サービス研修」が開催されました。

午前中は「科学あそびの可能性」と題して、「静岡自然を学ぶ会」の代表である池上理恵氏にご講演いただきました。

池上氏は、小学校、大学、図書館等で自然・あそび・こどもの科学の本を繋げるワークショップや講演を行っています。この講演でも、科学の本を読んで興味を持ち、実際にご自身が試してみた科学あそびの実例や手作りの楽器、おもちゃ等をたくさん紹介しながら、科学の本のすばらしさや魅力について、熱く語ってくださいました。

(2ページ目にて、概要を紹介します。)

午後は、当館講堂にて、「子ども図書研究室講演会」が開催されました。テーマは『子どもの科学の本を知る』です。

最近、科学実験がマスメディアに盛んに取り上げられ、科学実験を扱った本も人気が出ています。子どもたちの好奇心に答え、子どもたちを科学の世界へと誘う科学の本について、実践女子大学教授の塚原博氏をお迎えして、お話しいただきました。

日本にはとてもよい科学絵本がたくさんあり、それを子どもたちに伝えてほしい、読み聞かせにもぜひ科学の本を使ってもらいたいというお話から始まり、講演の中では、おすすめの科学の本もたくさん紹介していただきました。

(3ページ目にて、概要を紹介します。)

◇子ども図書研究室のテーマ展示◇

◆「きのこの本」

「きのこ」にスポットを当てて、2011年以降に出版されたきのこの本を集めてみました。

◆「『ヘンゼルとグレーテル』読み比べ」

グリム童話誕生200年の記念特集第2弾、『ヘンゼルとグレーテル』の本の特集です。

◇イベント情報◇

◆平成24年度第20回静岡県図書館大会

会 場：静岡県コンベンションアーツセンター
グランシップ

日 時：平成24年10月29日(月)
9:50~15:45

申込み：申込用紙(県立中央図書館ホームページからプリントアウト・県内公共図書館で配布)に記入の上、来館、郵送またはFAX

宛 先：静岡県立中央図書館企画振興課振興係
〒422-8002 静岡市駿河区谷田 53-1

F A X：054-264-4268

締 切：平成24年10月4日(木)

※第3分科会は10月18日(木)まで

◆子どもの本に関する分科会

：13:45~15:45

◇第2分科会

《乳幼児・児童・YAに対するサービス》

テーマ：「調べるから始まる本の世界~111枚の自由研究アイデアカードから読書へ誘う(東京都立多摩図書館の事例より)~」

発表者：浅沼さゆ子氏(東京都立多摩図書館 児童青少年資料係)

◇第3分科会《子どもと読書》

テーマ：「西巻茅子氏講演会~こども一絵本一わたし~」

講 師：西巻茅子氏(絵本作家)

◇第5分科会《読書活動》

テーマ：「本のもつ力~絵本を通して知る 現在と未来~」

講 師：草谷桂子氏(児童文学者)

◇第6分科会《学校図書館》

テーマ：「学校図書館と公立図書館を使いこなして、学びを深めよう。~発見!意外に知らない図書館活用術~」

講 師：小林路子氏(慶應義塾大学文学部 非常勤講師 市川市図書館支援スタッフ)

講 師：岡田克彦氏(静岡市立蒲原東小学校長)

池上氏は、『つばさをもった恐竜族』という本を読んで、恐竜の始祖鳥とカルガモの違いは竜骨突起にあることを発見し、科学あそびから繋がる本の世界について、次のように語ってくださいました。「科学の本を楽しむことは、一つのことを手掛かりにして、自分の頭の中で、いろいろな知識を繋げていくこと。もしかしたら、間違っているかもしれない、でも、こうではないか、ああではないかと想像して楽しむプロセスが大切である。それができれば、子どもはもっともっと科学を楽しめるようになるでしょう。」

他にも、池上氏が“なんて面白い科学の本なんだろう!”と感動した本に『こおり』という本がありました。水は、急に凍らせると自分の仲間でない物質を押しつけて、自分の仲間のみと手をつなぎたがる性質があり、その性質を使って、本当に透明な氷ができるのか実験してみたそうです。「だって、本当に作ってみた方が楽しいでしょ？」科学あそびの面白さはここにあると、池上氏は笑顔で話します。

この本は、29歳の若い編集者によって作られました。彼は子どもの頃、ピンクの氷を作ろうとしたが作れなかった、その謎を解きたくて、様々な本を読み、ついに前野紀一氏の文と出会い、「これだ!」と長年の謎が解けたそうです。そして、「この人と一緒に本を作っていく」と心に決め、今の職業に就いたという興味深い逸話もお話してくださいました。

後半は、科学の本を読んで、実際に試されてきた科学あそびや手作りのおもちゃ、楽器など多数紹介しながら、実体験と知識の結びつく瞬間の感動やすばらしさについて、目をキラキラさせながら語ってくださいました。

また、「本だけ見ても面白くない、実際に作ったものを紹介することで、子どもの本への興味・関心はぐっと高まる。」と、子どもと科学の本をつなげるブックトークの例として、牛乳パックで作った“びっくり蛇”というおもちゃを見せた後、『牛乳パックの実験』という本を紹介すると、子どもたちは必ずその本を借りていく話を挙げました。

池上氏の指導で、ストローを回すと紙コップの人形が前回りや逆上がりをするおもちゃ、鉄棒人形“よいしょ”を作ったり、世界折り紙選手権で準優勝した紙飛行機を作り、どうやったら遠くに飛ぶのかを試したり、気がつけば、会場にいるみんなが子どもに戻って楽しい時間を過ごしました。

最後に、「日常には面白いことや不思議なことがたくさんあるが、それを図書館で確認していくことで、さらにその世界を広げられる。これからも、居心地のいい、豊かで楽しい子どもの科学のコーナーを、子どもたちのために育ててほしい」と結び、これからの私たち大人の果たす役割について示唆しながら、講演を閉じました。

所蔵資料から

知識

『こおり』

前野 紀一／文

斉藤 俊行／絵

たくさんのふしぎ傑作集

福音館書店

2012年6月



流水はなめてみるとしょっぱくないのか、本当に透明な氷ができるのか、思わず試してみたくなる本です。氷の不思議について、色鮮やかな絵と具体例を交えた文章で、わかりやすく説明されています。

(島出)

子ども図書研究室講演会 「子どもの科学の本を知る」報告

講師の塚原博氏は、レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」という言葉を引用し、子どもは、生まれながらに自然って美しいなあ、不思議だなあと感動する心を持っていると語られました。そして、その子どもが生まれながらに持っている驚異の念、絵本『ひとまねこざる』の主人公ジョージのような好奇心、観察力、探求心を育てることや、それらが育つ手伝いをするのが、私たち大人の責任だとお話しされました。

お話の中で印象に残ったのは、“科学絵本は、「直接」「すぐ」には役立たないが、「ゆっくりと」「間接的に」「必ず」役に立つ” “科学の本、科学絵本はノンフィクションであるが、物語絵本や児童文学と同じように楽しむために読むことが重要。子どもたちは、楽しいことやおもしろい遊びの中から大切なことを学び、それが単なる知識ではない智恵となる。” という言葉でした。塚原氏は、スティーブン・クラッシュェンの『読書はパワー』という本の中から、「情意フィルター」という言葉を引いて、楽しい時には、フィルターの目が開いて粗くなり、情報が子ども自身の中に入りやすくなると説明されました。

さらに、「科学絵本」とは、絵本という表現形式を使って科学を伝える本ということで、科学絵本の望ましい条件を、『子どもの本と読書の事典』の「科学絵本」の項目から挙げられました。興味のある方は是非ご覧ください。図書の詳細は「所蔵資料から」にあります。

そのほかにも、科学の本を読むときの指針として、『科学新入門 科学の学び方・教え方』（板倉聖宣／著 太郎次郎社）の「本の読み方・教訓集」も紹介されました。

塚原氏が講演会で取り上げた科学絵本の一部をご紹介します。

『みず』（長谷川 摂子／文 英 伸三／写真 福音館書店）

『木はいいなあ』（ユードリイ／作 シーモント／絵 さいおんじ さちこ／やく 偕成社）

『たんぽぽ』（平山 和子／ぶん・え 福音館書店）

『じどうしゃ』（寺島 龍一／画 福音館書店）

『りんごとちょう』（イエラ・マリ／さく エンゾ・マリ／さく ほるぷ出版）

『しずくのぼうけん』（マリア・テルリコフスカ／さく うちだりさこ／やく ボフダン・ブテンコ／え 福音館書店）などです。

また、子どもと科学の本をつなぐ手段として、『かわ』（加古 里子／さく・え 福音館書店）と『地面の下のいきもの』（松岡 達英／え 大野 正男／ぶん 福音館書店）を折本の形に仕立て直したのものや、『風車をまわそう』（おおたけ さぶろう／文 つきだ たかよし／絵 国土社）から、紙で作った風車などを見せていただきました。折本の『かわ』が舞台上長く広がった時には、会場からも感嘆の声が上がりました。

終後のアンケートからは、「今日紹介された本を子どもと読んでみたい」、「読み聞かせに工夫して取り入れてみたい」などの声が寄せられました。

所蔵資料から

研究

『子どもの本と読書の事典』

日本子どもの本研究会／編
岩崎書店

1983年4月

編者である日本子どもの本研究会の創立 15周年記念事業として刊行された、子どもの本と読書に関する総合的な事典。822p。

（鈴木由）

新着資料から

知識

『介助犬を育てる少女たち
荒れた心の扉を開く
ドッグ・プログラム』



大塚 敦子／著
講談社
2012年6月

カリフォルニアにある少女更生施設「シエラ・ユース・センター」では、20年近く前から非常にユニークな更生プログラムを行っている。手や足に障害のある人の手助けをする介助犬を訓練することによって更生を図る「ドッグ・プログラム」である。

複雑な家庭環境で育ち、自己肯定感が希薄だった少女たちが、介助犬の訓練を通して自らも成長していく。施設長や介助犬トレーナー（日本人）ら、それを見守る大人たちの姿勢にも好感が持てる。【中学生から】（児玉）

文学

『名犬ボニーはマルチーズ
1 ボニーがうちにやってきた』
ベル・ムーニー／作
宮坂 宏美／訳
スギヤマ カナヨ／絵
徳間書店
2012年6月



引越したばかりで周囲になじめず、寂しい思いをしていたハリーは、自分を守ってくれる大きくてたくましい犬を飼いたがる。でも、やってきたのは、小さくてウサギのようなマルチーズのボニー。最初はがっかりしてボニーに冷たく接するハリーだったが、かわいくて、賢くて、勇敢なボニーの大活躍でハリーの生活は好転し、次第に前向きに生きる勇気が湧いてくる。

各章の最後はボニーの目線でお話がまとめられており、そこもこの物語の面白さの一つになっている。【小学校中学年から】（島出）

文学 『りっぱな兵士に

なりたかった男の話』

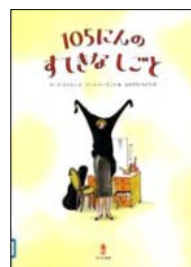


グイード・スガルドリ／著
杉本 あり／訳
講談社
2012年6月

新兵カスパーは、上官から、山の上の古い風車小屋を監視するよう命令を受ける。山では、しわくちやの老人と、老人の牛“ももちゃん”、グレーの小ネズミ（後にネズミンと命名）に邪魔されながらも、「りっぱな兵士であるための9か条」に従って、小屋を守るべく奮闘する。次の命令が届くまで…。その間に眼下の町は空爆や戦車の砲撃により次々と破壊されていく。

コミカルなやり取りや挿絵で軽やかに描きながらも、自ら考えることを放棄するという恐さを伝える。【小学校高学年から】（鈴木由）

絵本 『105にんのすてきなしごと』



カーラ・カスキン／文
マーク・シーモント／絵
なかがわ ちひろ／訳
あすなる書房
2012年6月

オーケストラの105人のメンバーは、演奏会のある夕方、それぞれの家でしごとに出かける準備をする。体を洗い下着をつけて、男の人はタキシードに、女の人にはドレスに着替える。これから家を出て、何百人もの観客のいる音楽ホールへと向かうのだ。メンバーの様子は時にユーモラスに淡々と描かれるが、ラストで彼らが心をひとつに合わせ、うっとりするほど美しい音楽を作り上げた時、その感動が心に響く。

1982年に岩谷時子訳で出版された本の新訳改題である。【4、5才から】（小松）